

「技師長最終年総括」

小川赤十字病院 小林 教浩

令和3年3月にて定年退職を迎えることになりました。昭和57年4月に小川赤十字病院に就職、見習い期間3ヶ月を経て放射線科に入職、以来39年目になります。最初は一般撮影に配属、というとはどこ？になりますが、次はなかなか無く、後輩が入職するまで毎日、午前中は一般撮影で一番忙しい撮影室担当、午後はポータブル撮影業務でした。この期間5年です。それでも、その当時は理不尽だとも思わず体力もあり、そのうえ無知でしたので、職場とはこのようなものであろうかという疑問さえ持ちませんでした。

まる5年経過し放射線技師の後輩が1人入社、都内の病院にて2年間の放射線業務経験者です。いざ、後輩がきて呆れたことは、仕事上何一つ教えられないことでした。教えられることは近くの飲み屋さんぐらいのものでした。それでも、患者さんとの対話や撮影業務はむしろ好きでしたので業務にストレスを感じることも無く先輩・後輩と夜の酒を楽しみに仕事をしていました。その頃の赤十字病院放射線科の構成員は放射線技師7名全員が男性で受付に医事課のおばさまがでんと居たように記憶しています。完全な男社会であります。

何の進歩も無く漫然と仕事をこなして入社10年です。赤十字病院も遅ればせながら本館増築となり撮影機器もMRI・RI・血管造影装置が新設です。装置新設に伴い放射線技師も3名増員、3名がそれぞれ違う病院で数年放射線技師として撮影業務経験者です。この技師3名の入社が私の放射線技師としてのターニングポイントであったように思われます。新しい撮影機器の稼働前に私も入れて係長クラスの3名の放射線技師が大学病院などで2週間の研修を実施しました。研修はMRI担当、RI担当、血管造影担当に分かれ実際の業務に支障を来さないように配慮しながら埼玉県内の大学病院の放射線科にお世話になりました。私の担当は血管造影で自治医大の血管造影室にお世話になりシネ撮影とDSA撮影を齧りました。2週間ぶりに赤十字へ入社して血管造影業務の開始です。その当時、循環器内科の医師が3名おりました年齢も近く35歳から40歳の働き盛り、私もほぼ同年代でありました。いざ心臓カテーテル検査に立ち会いますと医師の会話の内容が理解できないシネフィルムの編集が出来ない、ただ、血管造影室にいるだけの存在でした。どうにか検査を遂行できたのは、3名増員時の一人であるA技師がカテーテル検査経験者であり医師の会話を理解しシネフィルムの編集もお手のものでした。後輩に検査を教わりながらの日々がしばらくの間続きました。

A技師に頼るところが多々あったのですが、優秀なA技師はCT班からもMRI班からも触手が伸びておりやがて血管造影室より引き抜かれるのはさすがにのん気な私でもなんとなく解りました。次に血管造影班にやってきたのが、B技師です。この技師は勉強が嫌いで仕事に対する意欲も向上心もないという典型的なサラリーマンタイプです。このB技師が、血管造影班に配属されたことで私の立ち位置が少しずつ変わっていきました。仕事を教える立場に無理やり立たされた感がありしどろもどろになりながらもB技師に指導しながら日常業務をこなしていました。やがて教えることに妙な快感があり、このころから少しずつ勉強をやりだしたと記憶しています。この当時は、出不精ですので赤十字放射線技師会や日本放射線技師会の勉強会に出席することは少なく主に専門誌を読むことにより知識を得ていました。理解できないところや疑問があるところは、循環器内科の先生や放射線科部長の先生に直接聞きました。循環器内科の先生も放射線科部長もほぼ同年代でお酒を一緒に飲むこともあり恵まれた環境にあ

ったと思います。この頃に小川赤十字病院が2次救急病院の指定をいただくために医療職2が終日在院することが条件にあり、当放射線科も放射線技師増員を病院側に要望したところ新人技師を1名確保することが出来ました。きっちりしたものではないのですが、なんとなく新人教育が必要視され始めた頃でした。

この時の新人は、鈴鹿医療大学を卒業した1年目でMR I業務を中心に一般撮影・TV業務など教育は行いましたが、全ての撮影機器を網羅するような教育マニュアルは無くこれから10年程で完成することになります。この頃、2代目技師長の定年が近く消化管造影検査が手薄になることが予想されたので消化管造影検査経験者を募集しました。期待に違わない放射線技師が入社したのですが、技師歴4年目であり新人教育が出来ませんでした。そんなこんなで外部から技師長が着任して（放射線科内は色々ありましたが）MR I装置を1台体制から2台体制に増加すると経営面でも有利であると病院幹部を説き伏せましてMR I撮影経験者を1名募集、みごとに期待に違わない放射線技師が入社しましたが、技師歴6年目の経験者で新人教育はまたしてもできませんでした。この頃の私を思い返しますと40台後半で役職は放射線科課長、後輩の技師が7名の中間管理職になっていました。

前述いたしました外部から着任した技師長が立派な放射線技師教育論を持っておられ病院実習マニュアル・新人教育マニュアルのひな形のようなものを作製していただきましたので、ああしよう、こうしようで完成しました。（日本赤十字診療放射線技師会に提出）新人教育カリキュラムの期間は4年3ヶ月になりました。このマニュアルを実行できるのはいつのことやらと案じておりましたが、先輩が定年になり今一人の先輩が早期退職に応じられ欠員補充の形で2年連続無垢な新人が入職いたしました。新人教育はプログラムのとおり順調に消化していきますが問題は新人の労力を当てにできないことで、うまい具合にロートルが働かされた気がしないでもありません。

なにはともあれ現在（2020年）新人教育を終えた技師は4名、教育中が2名、新人教育修了者の4名は当放射線科の中核であり逞しく賢くオールマイティな技師になりました。これからも向上心を持ち頑張ってくれるものと思います。新人教育は現在2名進行中で来年度採用者にも実施されていくのでしょうか。新人以外に負担の掛かるところはありますが、ワンチームで進んでいるようで良いのではないのでしょうか。まとまらない文章ですが、教育は必要でありいくつになっても少しでも前に行けるように努力することが社会人として必要ではないのでしょうか。

最後に座右の銘を「仕事は人生最大の暇つぶしである」 さあ春から何をしましょうか